

## 藤島の福祉バス 更新後に鶴岡に移管か

鶴岡市の福祉バスは市社会福祉協議会で管理運営し、鶴岡地区2台、藤島地区1台があり、藤島地区は藤島福祉センターで利用受付してきました。

今年度予算で藤島地区の福祉バスが更新される予定ですが、市社会福祉協議会で日本財団への補助金申請が遅れています。

日本財団は、ポートルズの売上を財源に活動している民間の助成財団です。

バス更新後は、鶴岡に移管される予定で、鶴岡地区の福祉バス利用は、期間ごとに2回に分けて抽選が行われ、1団体1回の予約に限られます。

藤島地区にとっては、利用回数や抽選など大変不便になりますので、地区配車を求めることが大切です。

### 市バスも利用不便

市マイクローバスは藤島1台ありますが、平成23年4月に使用基準が改められ、使用は市が主催・共催する事業で職員が同乗とされ、住民の社会活動に参加する便宜供与ができなくなっていました。



第26回ふじの花まつりが13日～14日、藤島体育館で開催。13日夜には「藤見の宴」で小野寺裕さんらの「パッチワーク」による歌が会場を盛り上げました。

## 国保証留め置きは無い 市は通常保険証を交付

「民報藤島」4月30日付の記事「鶴岡市でも『受診手遅れ死亡』の危険しかなく、しかも中で『国保証留め置き』について、市当局が調べた結果、留め置きの事実はなく、当該6代の男性について平成25年度までは3ヶ月の短期保険証を交付していたが、26年度以降は有効期間1年の通常保険証を交付していたことが分かりました。

国保証は郵送で届くため、開封し所持して

## 庄内地方の凧文化 ⑪

たかが凧、されど凧の我が人生(一)

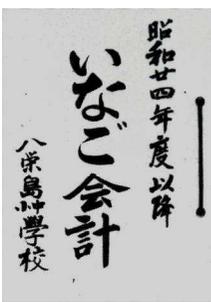
鈴木隆（小中島）

ある。

私は昭和20年八栄島村国民学校に入学した。その年8月15日の昭和天皇の玉音放送を微かに覚えていた。敗戦により国民はすっかり疲弊し切っていたし、生活物資は不足な上、ヤミ値段で手に入らなかった。そんな状況から、学校予算も極端に不足していて、伸び盛りの子どもたちの力の基礎となる運動用具の整備は後廻しになって甚だ不備だった。そんな中、八栄島小では（近郷の学校も同じであったと思う）、3年生以上（昭和25年時、159名）は毎年何回かの蝗捕りがあった。



大鍋でいなこ茹で（昭25）学校の大きな大鍋で茹でた蝗は子ども達が自分の村で売り歩いた。各家では、子ども達が捕った蝗だからと快く買ってくれたので、いなが会計はいつも完売だった。売り上げ金は主に運動用具や本の購入に充てていた。



この蝗捕り競技は暫く続き、私が藤島中学校2年生の時（昭和28年）貰った賞状が今も

終戦後は食糧増産の国策によって、「働かざるもの喰うべからず」の風潮とともに、子ども達も家での手伝いは日常的であった。農家の田植時期には、確か4年生以上かと記憶しているが、早月休み（田植休み）があった。この時期は猫の手も借りた農家にとっては、田植休みは助かった。非農家の子どもは他の家の手伝いや、兄弟の子守などの役目があった。また、秋には稲刈りや稲上げで忙しかったので、子どもも学校から帰るとそれなりにあてにされていたので、こんな社会情勢の中では凧揚げどころではなかった。



稲刈り時は子どもも田んぼで（昭和25年頃）

稲上げ時期、私は「瘦馬」に何束かの稲を載せて道路まで運び出すのが役目で、そんな時、気を紛らすのによくカスベ凧を揚げた。大空に凧を切って舞う凧は格好良く元気を貰うと共に、その勇姿に憧れを抱くようになり、それがキッカケで凧作りが私の生涯の趣味となった。

